のれんと腕押しをする、といふ樣な類で

狆か嚏をした樣な顏　砂糖屋の門を驅つて通るやう

米つきばつたがお辭儀をするやう　家鴨が文庫背負つて歩くやう

雪隱で槍をつかふやう

などはあまりに離れ方の甚だしい形容であるからをかしい。「卵に目鼻」「泣面に蜂」は相等な比喩であるのでをかしくない。

これまでの話は可笑美 Comic に關しての話であるけれども、まだ外に西洋にはユーモアといふものがある。可笑は普通の人が日常のものに比べて矛盾を見るのであるが、ユーモアは詩人の認むる諧謔で、是れにはむしろ笑を伴ふよりも、却りて冷やかな涙を伴ふものである。詩人には世を觀察して現實の世が理想の世界より遠いといふ事を感じて、これを慷慨し改良しようと歎く詩人がある。又或は單に悲觀するもの即ち悲哀詩人があり、又之を樂觀する樂天詩人がある。ユーモリストは理想に遠い現實の世の矛盾弱點を認めて之を達觀し、人の眞面目に見て矛盾のない所に矛盾を發見し、世間でつまらぬものと思ふ所にかへッて眞理のあるやうな事を發揮する。俳人には餘程この傾がある。又夢想兵胡蝶物語や、西鶴の作なども一方からみるとユーモリズムの傾向がある。現今の夏目嗽石などもよほどこの傾がある。（完）

◉明治年間に於ける女子訓の變遷

文學博士　吉田熊次

私のお話する題目は明治年間に於ける女子訓の變遷となつて居ますが實は題目の方が大き過ますので私の申す事はそんなに大きい事でもなく又掲げた題目のやうに興味あるものでもありません。

私は修身科の擔當教師として明治年間における女子修身書の變遷を研究しようと思つて餘程前に文部省の修身教科書調査の時文部省の圖書館にある古い修身書の女子に關する部分だけ取つて女子の修身に關する教を調べて見ました。本日お話しますのは其の中の一部であります。明治年間に於ける修身書の變遷殊に小學校に於ける修身書の變遷は大体三時期に分つことがよいと思ひます。なほ委しくすれば四期になります。初めは明治四五年より十四年まで即小學校教則が定まつて教授要目の大体が定まつた時までをいひます。第二期は十四年から二十三年即ち教育勅語の發布迄でありまして第三期は二十三年から三十七年國定修身書の出來るまでをいひます。卅七年から現今至にるまでを第四期に相當するものと致します。

第一の時期といふのは未だ教育の細かな規定が定まらない時で女子の修身書も區々でありました

けれども大体から申しますと歐米の飜譯書でありました。またそうでなくともこの趣意によつたものが多くありました。細かにいふと第一期といふも明治十年頃から多少修身書の樣子も變つて居ます。七八年頃までは隨分奇拔な面白いものも出て居ますけれども飜譯書に由つて女子に修身を敎へやうとしたのは十三四年頃までであります。

第二期は小學校敎則に由つて定められた格言を主としそれに古人の善行を加へて授けんとし大体に於て格言本位でありました。此處に私の持つて來てゐます木澤成肅氏の小學女子修身書は全く此の趣意に基き殆んど格言を以て出來てゐます。此時代には稍異つて居る例話を主とするものもありました。宮内省出版の婦女鑑などは皆これで出來てゐます。其の敎へ方は支那及び日本の學者の格言を以てしたので古風のものでありましたけれども變遷があります。二十年前後は第二期に於て特殊な思想があらはれました。我國に女子問題が盛んになつたのは明治八九年頃で再び盛になつたのがこの二十年前後であります。此時は著書も最も多い時でありました。福澤諭吉氏は時事新報の社說で大に女子問題を論じました。故に第二期といふも十八九年から二十三年に至る頃までは自ら趣を異にしてゐます。けれども大体に於て十二三年頃の小學校敎則の精神を貫いて大なる主義の變更を見ません。

第三期に入つては多少の變遷があります。精密にいふとはできませんが二十三年から二十六年までは勅語の精神によつて敎授はしましたが未だ其の趣旨が充分に整頓しませんでした。二十七八年頃迄に稍勅語の主意が深く理解されるやうになりました樣であります。卅年になつて再び福澤諭吉氏の女大學評論及び新女大學があらはれて女子問題幷に女子訓に關する世人の注意を惹きました。けれども福澤氏の說は此時初めて現はれたのではなく彼の廿年前後の說を敷衍したので一朝一夕に出來たのでないといふことはその序論を見ても分かります。日露戰爭が起ると同時に他方には國定敎科書が整ひ我が國の修身書の上に一變化を齎しました。斯樣に修身敎授の變遷を尋ね各時期に於ける內容を解剖しようとするのは六ケ敷い事であります。そして私が今日お話しますのは第一期に於ける修身敎授の有樣の一斑にすぎません。

明治初年に於ける修身敎授は主として飜譯書によつて居たとは明らかな事實であります。學制發布の頃は修身科に於ける敎は男女別にす可きものと考へたるか否かは明らかでありません。そして小學校全般の規定の修身參考書は共通的のもので而も多くは飜譯書でありました。女子に關する修身訓として初めて現はれましたのは私の見る所では明治七年に出版せられた「女學の梯」といふので著者は勝浦鞆雄氏であります。上中下の三卷から成つて居りまして此書は種々の點から面白うございます。明治の初めに於て我國の思想界を動かしたものは勿論福澤諭吉氏でありました。其中でも「學問のすゝめ」は餘程敎育思想を支配しました。かの學制發布の被仰出書の中にも諭吉氏の樣な思

想があります。即ち學問萬能主義でありました。此主義は女學の梯に現れて居ます。之は一種の理性主義でありまして學問さへすれば何人でも立派な人になるとが出來るといふので外國にても理性主義の時代には學問萬能主義が唱へられました。福澤氏は英米の思想を有して居る人でありますから經驗主義でありませうが、此女學の梯にも此思想が現はれて居ます。第二に注意すべき事は此書には所々に眞神といつて居るとであります。おもふに此人は少くとも此の著述當時は基督教を信じて居たものでありませう。第三に注目すべきは其中に支那思想のあるとで即ち良知良能といふとが多く使用せられて居ます。其上女子の教訓も全然英國風の經驗學的でもありません。之れ蓋し明治初年の文化の思想の反影でありませう。即ち當時の古風の頭腦の人が歌米風を取入れやうとしたとでありますから我れ知らず矛盾したのでありませう。例へば明治初年の高等教育をうける學生が一方にはミルやスペンサーなどを口にしながら一方には帶刀して酒樓に上つたといふ滑稽と同樣でありませう。即ち當時の此の外面の姿はやがて思想の狀態でありまして女子訓にもこの影響は及ぼされました。これは女學の梯に於て現はれて居ます。然るに明治九年に著はされた土居光華氏の文明論女大學は餘程極端に進んで居ます。女學の梯には種々混合した思想か融和せずに現はれて居ますが文明論女大學の方は餘程統一して支那思想は全然除かれて居ます。そして基督教の思想は或は多少あつたかも知れませんが寧ろ英國風の經驗學的理性主義一言すればミルの女權擴張論を基礎として德川

時代の女大學を評論して居ます。

明治十年西坂成一氏編纂の教女軌範といふのがあります。此書は果して十年に書かれたのであるか或はそれ以前に書かれたのであるか。それは其始めに愛媛縣知事藤野啓氏の序文に明治六年六月の日附があります。これによつて見ると少くとも六年六月に脫稿せられたものでありませう。併し出版は十年二月であります。但し思想は第一期のものとしては妙なものであります。寧ろ六年頃の德川時代の思想の殘りとして見る方がよいでせう。此書は內外の兩篇に分ち更に內篇は幼儀十則に分ち外篇を幼儀十則に分つてゐます。內容は全く古風な有りふれた事をかいて居ます。十則とは

一、父母に仕ふる心得　二、舅姑に仕ふる心得
三、夫に仕ふる心得　四、家を營む心得
五、早起の心得　六、學作の心得
七、禮を學ぶ心得　八、對客の心得
九、母儀の心得　十、節を守る心得

十戒とは

一、不孝の戒　二、不賢の戒
三、不順の戒　四、不睦の戒

五、母訓の戒　六、懶惰の戒
七、慢の戒　八、安眠の戒
九、失禮の戒　十、恋言の戒

でしかも簡單であつて興味なく書れてあります。惟ふに此書は愛媛縣の小學校の爲に書いたものでありませう。其序文に「今世に學を講ずるもの概ね西説にとる云々」とありますが之れは未だ歐米の文化に潤はないものといつてよいでせう。而して明治十年頃之れが行はれたとすれは此頃既に歐風に反對して儒教主義が行はれたかとも思はれます。其他十年前後には種々の書物があります。此に阿部弘國氏著の修身訓といふのがあります。之は群馬縣師範學校の藏版になつて居る所を見ますと群馬縣小學校のために編纂せられたものでせう。此書は第一期の修身訓の特色を充分に發揮して居ます。大体歐洲風でありまして前後の兩篇から成つて居ます。後篇は模範篇といつて内外婦人の例話を集めたものであります。第一篇は修身大意第二篇は學問篇第三篇は心術篇ととして本務、德が説いてあります。今の實踐倫理の樣なものであります。第四行狀篇で作法が説いてあります。第五は母儀篇であります。之は第一期第二期の思想の折衷せられたものであります。例話を加へ又は修身の理論としても純粹に第一期と異つてゐます。其れに類似したものを擧げると十四年出版の女訓（萩原啓著）は前の女子修身訓と趣を異にしてゐます。上卷には女性、女德、女學、女才、女言、女容、女藝等

を説き、下卷には夫を敬ふ、舅姑に仕ふ、子を敎ふ叔姑に和ぐ等のことが書かれてあります。其他十二三年頃に二三の飜譯書が出て居ります。大体十年頃までは歐州風で十四年以後になつて小學校敎則に由つて寧ろ古風な敎育が行はれました。之れから女學の梯に付いて如何なる事が書いてあるかをお話致しませう。此書は全体七五調の文を以て書かれてゐまして最初に序論として、

天地の萬物の其中に、獨傑出て奇はしく、妙なる知識を備へたる、人と生れて國運の、いやますますに進歩して、文明開化の隆盛なる、此大御代に遭ひながら、婦女なりとて眞神の、授け玉へる知識をば、磨勵せずして徒に、此月日をば送りては、万物の靈長たる、人と生出しかひぞなき。吾人ともに善惡を、よく辨別し曲直を、よく理會する奇はしき、良知良能おのづから、我精神に全備れり。是ぞ即天地の、萬物の中に就き、靈長と稱す所以なる。其全備れる奇妙はしき、良知を助け良能を、いやますますに長育つるは、專學業勉勵の、二の務に因るぞかし。當今の婦女子は朝夕に、歌舞管絃に從ひて、古今の事實に通じかね、事物の道理に暗くして、人たる道を知人の、世に乏きは外國の、人に對して恥づかしく、慨かはしさに肝若く、拙才を忘れつゝ、一筆のまにまに種々の、文書の中より書集め、世の婦女子等に朝な夕な、誦讀させて人とある道の奥所に分け入らん、學の業の梯と、この三歌を編纂すなり。

此中に理性主義の特徴を充分に現はして居ます。但し學問萬能主義は德川時代からあります。五條御誓文に知識を廣く世界に求めよとあるのも時代思潮でありませう。兎に角こんな序文のもとに

全篇三欵に分たれて居ります。而て全篇を通じて七五調で成つた歌であります。

第一欵には學問の大切なこと、友に交る心得、娯樂の心得等を述べてあります。其の學問の大切な事を敎へるには余程面白い事を言つて居ります。

第二欵は歐州の今日の實踐倫理を說いて居ります。第一身体に對する心得例へば居住についての注意に換氣法或は身体を穢すことの惡しき道理禁酒のこと等を七五調に書いてあります。

第三款上には之れも歐米の實踐倫理で他のものに對する務を說いて居ます。第一に禽獸虫魚に對する務を載せてあります。之れは直接に動物に對する心得とはせずして人の心の鍛錬上修養上今日でも小學校の心得中に入れてあります。第二には世の人に對する務で第一期の思想が現はれて居ります。第三に僕婢に對する心得之れは實際從來家族本位の我國に最も發達して居るべき筈で又實際は行はれて居つたが敎としてはなかつたのであります。此書にはこの事が余程親切に書いてあつて僕婢も亦一人格てあるといふ歐風の道德が明に現はれてゐます。

即ち僕婢も同じ人間であるから其自由意志を束搏してはならないと云ふ事が書かれてあります。之れが西洋の人權問題であります。其次に叮嚀に僕婢を使ふことが書いてあります。

一斯くの如く人權と云ふことを主張してゐますから師や老人を尊敬する思想はないかと云ふにそうではありまん。之れは日本にも西洋にもある思想であります。殊に注意すべきことはこの樣に西洋

の理性主義に由つて作つたものでありますから夫婦間の關係は男女同權を主張して居るかと云ふにそうでもありません夫婦は互に名譽と幸福とを分つべきものであると云つて居ります。女子は如何なることをすべきかと云ふによく夫に仕へると云ふにあるのであります。兎に角未だ女權の擴張迄には達して居ないのであります。

思ふに明治九年の土居光華氏の文明論女大學には極端に男女同權を主張して居る。然るに第二期には元にかへりて支那風となり勅語の發布に由つて愈問題が定まりました。而して明治初年に於ける女子訓の一端は女學の梯に由つて窺はれるのであります。(以上)

◉道德的智識と道德行爲との關係

文科四年　福田ふめ

道德的智識と道德的行爲との關係の中で、道德的智識が全〳〵道德的行爲となつて現はれうるものであるかと云ふ事に就いて、一寸常識的に考察して見樣と思ひます。先づ、其に就いて古人の說を窺ひ、而る後に其の古人の說を基礎として自分の考へを發表致したいと思ひます。其の古人の說は、ソクラテスの智德合一論を擧げ樣と思ひます。何故にこの人の說を出すかと申しますと古來、知行の關係に就いて論じた學者は多くございますけれども、皆其學說のほんの一部分をなして居るに過ぎませんでした。之に反して此人の知行に關する研究は、其の學說の大部分をなして居る爲であります。